



地域交流センター通信

都留文科大学 地域交流研究センター

地域交流研究センターでは、地域に根ざし、
地域と共同した活動を推進します。
つぎのような取り組みをおこないます。

- 1) 地域交流に関するプロジェクトの推進
- 2) 学校の先生方などの教育相談
- 3) 地域のニーズに応えた貢献活動
- 4) さまざまな地域交流の連携の推進

特集 地域交流研究 センターの出發

- 2 センター長あいさつ
- 4 地域交流研究センターとは何か

6 特集:地域交流研究センターの出發

- フィールド・ミュージアム研究プロジェクト
- 地域総合学習開発プロジェクト
- 甲斐の文化活動研究プロジェクト

- 12 地域貢献活動
 - 高等学校と大学の連携

- 14 教育相談活動
- 15 「山梨の魅力メッセンジャー」講座

01

May.2003

地域交流研究センターに

かける期待

文 今泉吉晴



私は当然のことながら、地域交流研究センターの発足に大きな期待を持つ者です。どのような期待を持つかは人によって違うでしょう。しかし、地域交流研究センターの発足には、地域というなれ親しんだ場所の自然と歴史と文化を大切にすると、文化と、私たちのくらしのつながりを何よりも大切にしたい、という願いをもって生きてきました。私は山や谷や泉が好きです。地域の人々が、そうした自然と、どのようなつながりをもって生きてきたか、これからどのようなつながりを持つとうとしていくか、に興味をもちています。

そこで、都留文科大学が、地域への関心を地域交流研究センターの発足という形で表明したことに期待するのです。

しかし、地域交流研究センターがいう地域とは、まさにそのように地域とのつながりを大切にすることを考えるがゆえに、かならずしも都留市とか、郡内を意味するものではありません。地域を大切に考える者どうしの交流を大切にすることを、地域交流の中には含まれています。

このセンター通信第一号では、地域交流研究センターの主だったプロジェクトやテーマを紹介しています。どのようなプロジェクトやテーマがあるか、このあとのページに紹介されていますので、ごらんください。ただし、はじめに書いた考えからして、ここで紹介される、地域交流研究センターの今のプロジェクト

やテーマと組織は、地域交流センターのあるべき姿を代表するものではなく、今の段階のプロジェクトやテーマと組織であることにも、注意していただきたいと思っています。

つまり、地域交流研究センターは、地域交流に関心のあるすべての方々の参加と提案を望んでいます。地域交流センターとしてあるべきプロジェクトとテーマと組織は、これからセンターを運営しながら考えていくことになる、と受け止めていただいた方がいいでしょう。

すなわち、ここで示されているセンターとは、今、現に地域交流を行っているか、ただちにとりかかろうとしている研究室を中心に組織された、限られた規模の交流センターです。なぜ、そうなったかという点、専任教員をおく余裕がないために、現実に交流をテーマにしている教員が兼務すること、着実な進展を期待しよう、ということになったからです。そして、そこを確かな足掛かりにして、センター全般の機能にもかかわってもらおう、という組織の仕方をとっています。

とはいえ、どのようなプロジェクトにする地域交流を目的とするからには、最終的な目的は同じです。私たちは、大学と地域は交流することでお互いに得るものがある、と考えます。大学も、地域交流によって得るものがこれからの大学になくてはならないもの、と考えたらからこそ、センターを発足させたのです。

では、得るものとは、いったいなんですか？ 表現の仕方は人によって違うでしょうが、地域と大学が交流することで、これまでの交流の蓄積を大切にし、よき交流をはかり、そして、よき未来を築くということでしょう。一言でいえば、よき学園都市を築くことに資する、といってもよいでしょう。私自身はこの地域交流研究センターのプロジェクトとしてフィールド・ミュージアム研究を担当していますが、どれほどお金をかけた大規模な博物館よりも、もっと楽しく、人間らしくなる博物館を地域につくることができる、という提案です。すでに、この研究によって、宝のネイチャーセンターが設立されました。これは大学と行政が協力してつくった施設として誇っていいものです。

しかし、私はこのような個別の計画を押し進めれば、それだけで地域交流研究センターは成果をあげたことになる、とは思いません。あわせて、もっと幅広く、長い目で見ると、大学と地域の交流はどうあったらいいかを、考えていくことが、センターの役割でしょう。都留文科大はこれまで地域と交流しながら育ってきました。創立五〇周年を迎えようとする都留文科大は、すでに五〇年間にわたり地域と交流してきたのです。

では、私たちはこの五〇年間に、どんなことがあったのか、それは大学と地域にとってなんであったのか、自らの歴史を認識しているといえるでしょうか？ そこに関心をよせ、研究することは私たちの大学にしかできないことであるのは自明です。私たちの大学はどのような研究によってこそ、未来を見据えることができるのであり、それは地域交流研究センターのプロジェクトになってしかるべきです。

さて、最後になりましたが、地域という中立的な表現でとらえられる大学の所在地に近い地域とは、大学にとって何でしょうか。さまざまな意味がありますが、重要な一つは誰もがなれ親しむ土地、つまりは大学の故郷であることによつています。故郷とは何でしょうか？ 私は、慣れ親しんだ地域、すなわち故郷は人間のまじわりにとって、またあらゆる生きもののまじわりにとって、特別に深い意味を持つと考えます。

私たちには、あらゆる感覚を使い、生きて、交わることによつてしか知ることができない何かがあります。大学という生きた組織にとつても、故郷である地域は学問と教育の死活にかかわる価値を持つでしょう。地域交流研究センターは、そのような独特の価値にかかわる大学の組織であると、私は考えています。



地域交流研究センター とは何か

都留文科大学地域交流研究センターは、「地域の大学」としての五〇年の蓄積をもとに、本格的に地域と向き合い、地域との共同的研究・教育や連携・協力した活動を進めるための本学の拠点です。ここを中心に、「地域に根ざし、地域を探求する大学」にふさわしい新たな歩みを開始したいと考えています。

文 = 森博俊

センターでは、本学にふさわしい個性的な地域交流を創造するために、次の点を大切にしたいと考えています。

- (一) 地域の現実の問題の中に、普遍的な課題を読みとり深める視点
- (二) 問題の現れる現場である地域に直接おもむき、現場に身をおいて考える視点
- (三) 「地域の問題」解決に取り組む地域の人々との協同・連携の視点
- (四) 地域社会全体を大学キャンパスと捉える(フィールド・キャンパス)とともに、全国的・国際的に広がる地域活動との交流・連携を進める視点

地域に関わる大学の主体性を明らかにするために、研究・教育との関係を中心においた活動になりますが、このことにより本学ならではの地域交流活動を追求したいと思います。

センターの活動

センターでは三つの柱にそって活動を計画しています。

【第一の柱】「フィールド・キャンパス」という考えに基づく地域と連携した研究・教育の推進

大学が主体的に地域の問題を取り上げ、地域の人々と連携を築きながら活動を展開します。そのために関心を共有する本学教員が既存の研究領域の枠を超えて共同し、「地域交流研究・教育プロジェクト」を組織します。今年度は、

(一) 人と自然が混在する都留の環境を活かし、「もの」本来の生きた姿に接することのすばら

しさを伝える自然博物館フィールド・ミュージアム」の研究

(二) 地域環境教育のデータベースづくりと教材開発を行い、「総合的な学習の時間」の実践を追求する「地域総合学習開発」

(三) 山梨県の歴史的な文化(文学)活動を解明し、資料展示などを通して市民のものにしていく「甲斐の文化活動研究」などを設定しています。

また、大学院臨床教育実践学専攻の教員が中心となり、学校現場の問題を中心に地域の教員へのカウンセリングや研修講座などを行う教育相談活動も、大学の研究・教育と地域のニーズとの接点で展開されるセンターの重要な活動として位置づけています。

【第二の柱】地域のニーズに応え、大学のさまざまな資源を活用した地域貢献活動

市民講座や現職教員講座、学校での「出前授業」、あるいは地域活動・ボランティア活動への参





的な地域交流活動のネットワークの一環に位置づけていくためのインターフェイスの役割も担っています。

おわりに

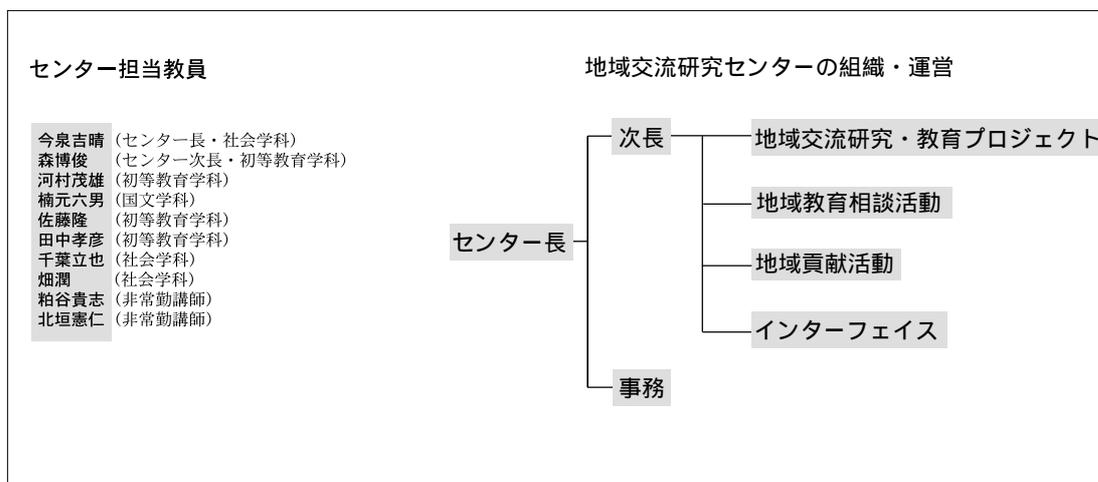
加など、いろいろな機会を通じて教員や学生が地域とかわり、活動することを進めていきます。国際交流ラウンジによる留学生と地域の人々との交流、市民に利用してもらえらる図書館の企画クラブ活動等での高校との連携など、さまざまなレベル・内容の地域貢献活動を行い、地域の生活・文化・教育・自治などの活性化と発展に貢献していきたいと思えます。

地域のニーズを受け止め、両者を会わせるインターフェイスの働きをします。とくに今日、市民活動や学校・福祉の現場、行政機関などからの大学に対する要請が増えており、潜在的な要求の掘り起こしもあわせ考え、活動的なインターフェイスの確立が大切です。インターフェイス自体が地域と大学の交流の場となり、そこから新たな共同の活動が生まれてくることをめざしています。

【第三の柱】地域と大学が会えるインターフェイスとしての活動センターは、地域交流活動を推進するために大学のもついろいろな資源を結集すると同時に、

また、地域交流活動の推進にとって、他の大学や地域との活動の交流とネットワーク化も重要な課題となります。センターは、本学の活動を全国的・国際

地域と連携・協力していく本学の拠点として、地域交流研究センター」を創設しましたが、課題をたくさん抱えながらの出発となりました。しかし、個性的な地域活動を創造しようという気概だけは強く持っています。歩きながらよい「センター」にしていきたいと思えますので、ぜひみなさんの声をお寄せください。



特集 地域交流研究センターの

出発

「地域に根ざし、地域を探求する大学」を目指して、今年四月、都留文科大学に地域交流研究センターが誕生しました。このセンターでは、都留文科大学ならではの「地域の大学」にふさわしい新たな試みをはじめます。そこで、創刊号特集では、センターが取り組むさまざまなプロジェクトや活動の内容を紹介します。



世界一古いネズミ、カヤネズミ。
わたしたちの身近な場所で暮らしています。

地域は「フィールド・ミュージアム」

文 北垣恵仁

定期的に足を運び、親しみを深めていく場所をわたしたちは「フィールド」と呼んでいます。

都留文科大学の周辺には、わたしたちになじみの深い魅力にあふれるフィールドがいたるところにあります。リスが食事にやってくるクルミの巨木もありますし、キャンパスのすぐそばにはムササビと出会える森もあります。また、地域の人々が自然との交流のなかで育んできた暮らしの知恵や記憶が色濃く残る土地もあります。

それらはすべて、「もの」との関係のあり方をじかに教えてくれる生きた標本であり、地域はそれら魅力あふれる標本をあるがままに展示してくれる博物館、つまりフィールド・ミュージアムなのです。

フィールド・ミュージアム研究プロジェクト

テーマは、人と自然の交流

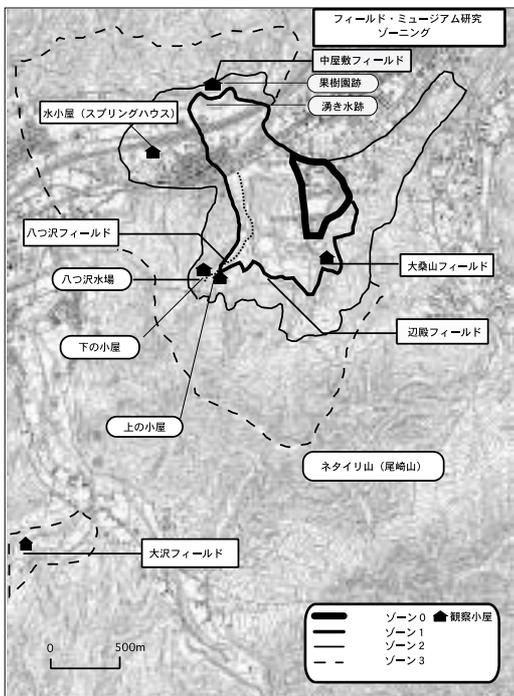
この研究プロジェクトでは、地域の人と自然の交流をテーマに、身近な自然に関心を寄せることの意味を問う実践をしていきます。

これまでわたしたちは、「ムサ

サビと森を守る会」の活動や「ムリネモ協議会」ムリネモとは、森の動物ムササビ、リス、ネズミ、モグラの頭文字をとったもの」の活動のなかで、アカネズミやカワネズミといった身近な野生動物と出会うための装置や場所を都留市内につくってきました。それは、「もの」をほんらいあった場所から切り離して展示する従来の博物

館や動植物園ではなく、「もの」ほんらいの生きた姿に接するすばらしさを伝えようとする自然博物館の提案であり、また自然と人々の営みを間近に見ることが出来る地域のよさを高く評価する試みでもありました。

地域交流研究センターにおけるフィールド・ミュージアム研究では、大田義おたか(元学長が二〇年ほど前に提案した「都留自然博物館構想」を受け継ぎ、「ムササビと森を守る会」や「ムリネモ協議会」の活動の成果をさらに発展させ、幅を広げて、人と自然をつなぐプログラムと森づくりを展開していくと考えています。



キャンパスを中心に、徐々に自然と親しみを深めていくゾーンを設けました。



ムササビの滑空 (撮影 = 小口尚良)

フィールド・ミュージアム研究では、キャンパスを中心としてそれぞれのフィールドの特徴を活かした活動を展開していきます。ここではそのプランの一部を紹介いたします。今後はみなさんが自由に参加できる運営をしていく予定です。

キャンパスでリスやムササビと出会う

キャンパスは身近な自然に親しむ入り口となります。ここでは、キャンパスの周辺にリスやムササビ、チョウなどの生きものがいつも訪れるような植物を育て、それらの生きものとふだんから接し、観

察しながら自然への親しみを深めることができる環境を整備します。たとえば、クルミやハシバミなど実のなる木をていねいに育て、キャンパス周辺に植えます。クルミやハシバミはリスの食物となりますし、わたしたちの食物としても活用できます。これらの木を実生から育て、キャンパスの縁に配置し森を育てていけば、やがて自然科棟や図書館からじかにリスやムササビの暮らしを観察できるようになるでしょう。

都留は貴重な自然の財産、知恵の宝庫

都留市十日市場の中屋敷フィールドには、かつて都留の代表的な農業の一つだったウメやモモの手入れをしながら果樹園を復活させるプロジェクトが進行しています。果樹の手入れや収穫が楽しめますし、ウメやモモの種を食物とする哺乳類の暮らしの謎に迫ることが出来ます。

十日市場では、富士山の豊富な湧き水を利用した水掛菜の栽培がいまも続けられています。水掛菜栽培は、都留市がもつ代表的なエコツアーの重要資源でしょう。このフィールドでは、長年にわたって十日市場で水掛菜を栽培してこられた清水貞一さんを中心に栽培の技を学びます。

夜も楽しむフィールド・ミュージアム

八つ沢フィールドには、むかしの作業道が馬道とともに残っています。十日市場の中野新作さんに学び、すでに昨年からの作業道の復活作業に取り組み、五〇メートルほど復元したところです。この道は、ふだん水のながれない沢に沿って伸びており、むやみにほかの土地を踏み荒らさず、環境に無理な負担をかけない道です。

この道を復活させることで、月明かりをたよりにキャンパスから夜の散策と動物観察が楽しめる工夫もします。動物の観察だけでなく



地域の人と作業道の復活作業をはじめました。

く、植物の観察も楽しめるようになれば、夜の観察はもっと楽しく愉快のものになるでしょう。そこで、オオマツヨイグサやカラスウリ、オシロイバナなど、夜に咲く花も育てる予定です。

このほかに、フィールドの地形を活かした「ソフト・エネルギー」の研究や大型獣との共生のあり方を探るなど、さまざまなプロジェクトに取り組んでいきます。みなさんの参加とアイデアをお待ちしています。

きたがき けんじ・本学非常勤講師。

写真＝小口尚良(おぐち ひさよし・都留市立立谷村第一小学校教諭)

はじまった、総合的な学習の時間



今回の学習指導要領の改訂では、「生きる力」の育成をめざし、各学校が創意工夫を生かして、これまでの教科の枠を超えた学習などができる「総合的な学習の時間」が新設されました。小学校では、今年から本格的な実施がはじまっています。中学・高校でもその準備を含めると、すでに数年まえから模索されています。

文・写真 = 佐藤隆

「総合学習」ってなに？

「総合的な学習の時間」は、これまでとかく画一的といわれる学校の授業を変えて、

(一) 地域や学校、子どもたちの実態に応じ、学校が創意工夫を生かして特色のある教育活動が行える時間

(二) 国際理解、情報、環境、福祉・健康などの従来の教科にまたがるような課題に関する学習を行える時間として新設。小学校では三年生以上から週あたり三時間程度、中学校では週あたり二〜四時間程度、高等学校では卒業までに二〜六単位配当されました。

「総合的な学習の時間」の特色は、国が一律に内容を示すのではなく、学校が創意工夫することを基本とします。

「自然体験や社会体験など体験的な学習や、問題解決的な学習も行う。」

「地域の人々の参加による、学習や地域の自然や施設を積極的に生かした学習も可能とする」
などがあります。(文部科学省)

「ホーム・ページ」(より)

以上のように「総合的な学習の時間」は子どもに関心や興味を生かしながらそれぞれの学校が、さまざまな工夫を凝らした学びをつくり出すことを求めています。さらに、私たちは、これを単に「時間」としてではなく、子どもと教師の学びが教室の枠を越えて、現代社会のさまざまな課題へむかう学習に発展させることを提案したいと思います。そうして子ども

の社会や自然に対する理解がより深まることも、子どもにとっても教師にとっても、やりがいのある、そして、楽しい学びのきっかけになればと考えています。

小・中・高校生のみなさんにお知らせしたいこと

みなさんは小さい頃にこんなことを思ったことはありませんか。

「サルはどうして人間になったの?」「なんで、女の子と男の子がいるの?」「なんで、みんな顔が違うのかな?」「なんで勉強し

なきゃいけないの?」「なんで学校があるのかな?」「なんで太陽がついてくるの?」「見えるのかな?」「なんで、海、かみなり、太陽もゆきとかがあるの?」

これは、ある小学校の一年生の子どもたちに、普問ふしぎだな」と思っていることをあげてもらった一部です。「総合的な学習の時間」は、みなさんが「なぜだろう?」「どうしてだろう?」と思っていることを出発点としながら、みんなでの理由を考えたり、分かったことをもとにして、もっと世界のことを知っていく方法を考える「時間」です。

「総合的な学習の時間」のなかで、先生や友だち、仲間と一緒に考えていくことも大切ですが、それでも分からないことや調べていく方法が見つからないときには、大学に今年からできた「地域交流研究センター」にも尋ねてみてくださいます。もしかすると、みなさんの疑問や発見が、科学や学問の発展にとって、とても大切なことになるかもしれませんよ。

大学のみなさん、小・中・高校の先生にお知らせしたいこと

私たちは地域交流研究センターで「地域総合学習開発プロジェクト」を立ち上げるにあたり、次のようなことを考えました。

(一) 大学における教員養成教育の一環としての「総合学習研究」今後の教員養成に必要なカリキュラムの核の一つとして、学生をフィールドに連れだし、体験を通して「自分の問題の発見」を支援する教育は欠かせないと考えています。当画、大学院臨床教育実践学専攻内の「教育実践学」領域において、実習と研究にかかわるものとして位置づけるとともに、学生が「教育現場」に何らかのかたちで接近するための援助・支援をおこないます。

(二) 都留市内の小・中・高校の「総合的な学習」の展開に貢献する

「総合的な学習の時間」自体は

国際交流、情報教育、芸術活動など多岐にわたるべきものですが当画は本学の蓄積と都留市の特色を生かしながら環境教育をテーマとする「研究会」を立ち上げるところから、すそ野を広げていきたいと考えています。「ここ」現場の先生たちの参加を促すように努力します。また、可能なところで「実験授業」「出前授業」と、その検討などを行い、現場密着型の総合学習研究をしていきます。

活動のイメージ

(一) 本学に蓄積されている都留市(周辺)の環境に関する資料の教材化のための研究

たとえば、理科教室での蓄積や社会科学科「フィールド・ミュージアム」構想と連携しながら、小・中・高校むけの「副読本」や成人までを対象とした「野外活動ハンドブック」づくりを行うことを考えています。

(二) 単なる「教材づくり」に終わ

らせずに、「総合学習」とは何かに ついての理論研究

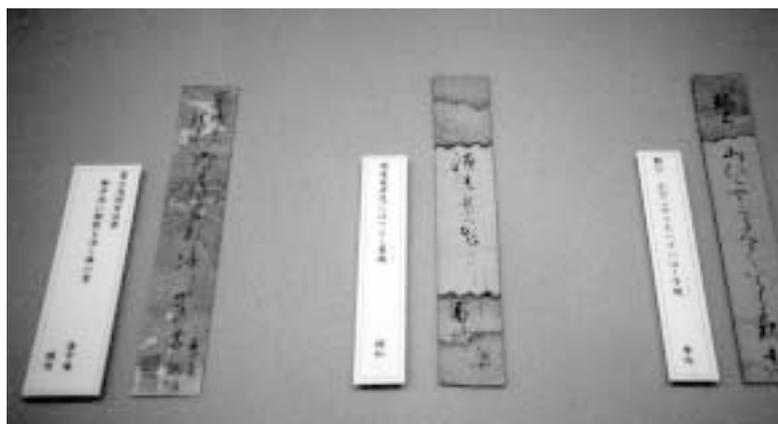
すでに昨年「臨床教育実践学研究」(第一集)を発行し、八月には「現職教員講座」を開くなど、総合学習に関する実践的研究は始まっています。また、これから数年をかけて、「総合学習」に関するテーマ・ベースづくりを行いながら都留市から全国へ「総合学習」の実

践と情報を発信していきます。

以上のような活動を展開するために、今年から来年にかけて準備をしていきます。「こつた活動に参加したい方、または各学校での「総合的な学習の時間」の展開にあたり、本学と協力・共同をすすめたいと考えていらっしゃる先生・学校は「一報ください」。



さとう たかし・本学初等教育学科教員



写真上：甲州俳諧展における展示
写真左：「芭蕉 月待ち講座」の様子

甲斐を地盤とした文学活動



文 = 楠元六男

江 戸時代にこの甲斐現在の山梨県でどのような文学活動が展開されてきたのかを解明しようとしているのが、私たちの活動です。山梨県の場合、近代文学(明治時代以降の文学)に焦点を定めて調査が進められています。それは特に山梨県立文学館で推進されていますが、それだけに古典関係は等閑に付されている状況です。沢山の資料と文書とが山梨県には眠っています。古典関係に照準をさだめて、いわゆる山梨学を確立する必要があるので、そのためには文字等の解読も必要です。さまざまな歴史的知識も必要です。今後、相当年数をかけてじっくりと解明していきたいと思っています。

さて以上の問題に対応するために、国文学科のスタッフが中心となってこの分野の調査・研究を進めています。その成果はミュージアム都留で、毎年公開するようになっています。以下、これまでの活動の具体を報告してみようと思います。

「芭蕉・旅・甲州」展

平成十二年にはじめての試みとして、芭蕉の谷村来訪に焦点をあてて、基礎的講演と展示を試みました。その年には、谷村に関する芭蕉の新資料が世に紹介される資料の拝借が可能になったのを契機として、「芭蕉・旅・甲州」と銘打って展示をうちました。十一月から十一月にかけての展示でしたが、図録も作成しました。本企画は学会でも話題になり、東京からも多くの人が見学にきたほどです。また学会展望にもとりあげられ、図録で明らかにした事実はこれからも問題にされることと思います。

谷村は一時期、秋元家が支配していました。秋元家の城代家老であった高山家に松尾芭蕉は足をこどもました。しかし秋元家は、川越・山形・館林と転封していった関係上、谷村から芭蕉の資料が発見されることはありません。ではありますが、他地域から発見される資料を山梨県の人も意識しておく必要はあるのではないかと思えます。

「山口黒露」展

今後谷村に関わる資料が紹介された場合は、積極的に展示を企画して、皆さんに紹介していかうと思えます。また芭蕉来訪の歴史的意義を検討し続けることも、私どもの責務だと考えています。

平成十二年には、享保時代に

に甲斐俳壇を蕉風に導いた山口黒露について展示しました。黒露は、甲斐の生んだ江戸時代の大人物、山口素堂に關係する人と言われています。素堂の薫陶を受けつつ、やがて甲斐俳壇をリードしていく存在になるのですが、甲斐俳壇に屈折点をもたらした黒露の一生をできるだけ面白く紹介することにとめました。今後、本企画を基礎として、黒露全集を刊行する予定です。

「石牙・漫々」展

平成十四年は、甲府あたりで

幕末に活躍した、石牙・漫々親子の歴史的意義を紹介しました。この親子は医者でありながら、甲斐の俳諧活動を全国区にした人物として注目されます。江戸や京都として長崎の人々と交流して、多様な活動を展開しますが、そこから特異な俳風を確立して幕末の俳諧史に一石を投ずるような動きを見せるところがこの親子の魅力です。今後、本企画をベースにして、いろいろな研究が発表されていくことと確信しています。

素堂の系

今年、江戸初の

素堂とその系統について紹介します。甲斐の俳諧活動を考えるにあたり、この人物の解明はどうしても重要で、芭蕉の友人であった素堂の事績を紹介しつつ、その影響を広く訴えていきたいと思っています。素堂は和歌・漢文にも長けており、きわめて広い知識背景のもと

本活動からの

メッセージ

私どもは、山梨に住みながら山梨の文化について知らないことを問題にしたいのです。毎年、地道に企画展を催しつつ、山梨で展開せられた文化人たちの俳諧活動を着実に紹介していきたいと思っています。

元禄時代における素堂の存在意義を、本企画において明らかにしていきたいと考えています。に活動してまいります。いわば芭蕉も影響を受けており、この人の存在あらはこそ、元禄俳諧は実りある文学を手中にすることができたと考えられます。素堂の存在意義を、本企画において明らかにしていきたいと考えています。

「高等学校と大学の連携のありかたを広くさぐる」

大

学教員が高校生諸君と親しく話しを交わしたり、高校の先生方とじっくり交流していくことは、今の若者たちと教育の課題をお互いにふかく理解していくうえで、たいへんに大事なことになるでしょう。また、学生諸君と高校生のみなさんとが交流していくことも、お互いの成長にとって貴重な機会になるに違いありません。

これまで、講演会や部活などをとおしてさまざまな交流はあったのですが、平成一四年度は桂高校と都留文科大との間で「連携」事業を試みました。（*）

昨年度は、今泉吉晴教授が指導して桂高校生が自然観察会に参加したり、寺田良一教授が「環境ホルモン」について、楠元六男教授が甲斐台村城下町と松尾苗蕉について、野口英雄教授が東南アジアを中心とする「世界遺産」について講義をおこないました。また、大学体育教室の柳宏教授、麻場一徳教授、鎌守信彦教授がスポーツをおこなう者の自己管理やトレーニング、かたなどについて指導をおこないました。さらに、佐藤隆教授が桂高校職員全体研修会で「児童生徒の学力低下について」と題して講演をおこないました。



高等学校と大学の



地域貢献活動

連携

文 = 畑潤

また、学生や大学院生二十数名が桂高校生に夏休み中や土曜日・放課後の学習支援をおこなう部活動においても、「剣道部」「陸上部」「女子バスケット部」演劇部への支援がなされました。

桂高校にとつても、都留文科大にとつても、たくさんの成果とさまざまな教訓を与えてくれるものとなりましたが、そういう経験を生かして高・大連携のありかたを広く探っていくしたいと思います。

* 大学教員が地元の高等学校に出向いて高校生に講義をするといった「連携」事業は、大学内でこれまで繰り返し話題になってきたが、なかなか踏み込めませんでした。平成一四年度に入り、都留市の「生涯学習まちづくり事業推進計画」の一部として、高・大連携事業が文部科学省の「生涯学習まちづくりモデル支援事業」として補助金を得られることになり、平成一四年度事業として桂高校と都留文科大との連携の試みを始めました。この事業は平成一五年度も継続していく予定です。

写真右上：桂高校の自然観察会

写真左下：桂高校での出張講義

高校生や大学生はどう感じたか 体験後の感想から

大学職員の出張講義が終わったあとの高校生の感想からは、新鮮な刺激を受け関心の幅がひろがった様子がみてとれます。また学生チューターを体験した学生も、将来を見つめ直すきっかけとなったようです。



はた じゅん・本学社会学科教員

絵 成瀬洋平(なるせ ようへい・本学社会学科学生)

たとえば、自然観察会を体験した女子生徒は、「人にいろんな性格があるように、動物にもいろんな性格があるわけだから、それをみんな同じように育てていくのはかわいそうだと思う」と感想を述べています。講義と自然観察会を体験することで、他者への共感のまなざしを深めた様子がうかがえます。

環境問題の講義に出席した二年生の女子生徒は、「今日は本当は来たくなかった」と本音を語ったあとで、テストの勉強のみをしても自分を守ることにはできないし、また生きていく上での知識を満足につけていくのは不可能だとももつ。(中略) 今日とはかく受講してよかった。また聞きたい」と、受講前と受講後の心境の大きな変化を素直に表現しています。このほかにも、出張講義を受講して、ふだんと異なる新鮮な経験ができたと感じを述べた高校生が少なくありませんでした。

高校生だけでなく、都留文科大学の学生にとっても自らの課題を放課後チューターの経験に重ね、具体的に検討する機会になったようです。英文学科三年の女子学生は「質問されたことに關して、自分はその三倍くらい理解していないと生徒にはうまく教えることができない」と感想を書いています。教えるという行為をとおして、自らの理解のあり方を問い直すきっかけとなったことが伝わってきます。

この学習支援活動の経験が自らの将来を見つめ直すきっかけとなった学生も少なくありません。社会学科四年の女子学生は「今回この学習会が意味あるものになったとするなら、それは高校生が互いに助け合うことを学び、また、今回においては、大学生と学習したことにあるのではないか」と思います。また、私自身も教育実習のときとは違う発見をすることができたように

思います」と感想を書いてます。放課後チューターの経験が、教育実習での成果をさらに確かなものにしたようです。

教職に興味はあるもの、とくにになりたい理由がはっきりしなかった英文学科のある女子学生はつぎのように感想を書いています。支援を通し、一番考え、興味を持ったのは教師という職業について。(中略)しかし今ようやく教師はいいなと思う理由を見いだすことができた。私はやっぱり、自分で勉強してそれを人に教えることが好きなのである。たとえ短期間であっても教育実習とは異なるより近い関係のなかで学習支援活動を経験することで、将来の自らの進路を深く問い直すきっかけとなったようです。

本文をまとめるにあたり、山梨県立桂高等学校から写真と感想の資料を提供していただきました。

困難をかかえる子どもと 向き合う力に



今年度、大学院に「臨床教育実践学専攻」が開設されました。「学習の遅れ」や「荒れ」「いじめ」「不登校」「障害」など、さまざまな困難をかかえた子どもたちと正面から向き合い、その学習・発達を援助する実践のあり方を一人ひとりの子どもに即して研究することを目的としています。地域での教育相談は、この専攻を担当する教員が中心となり、学校現場の「問題」を共有し、その解決のために大学院での研究・教育と連携しながら進めていきます。

教育相談部では、学校でのいろいろな「問題」についての先生方の相談に応じたり（コンサルテーション）、講座や事例研究会の開催など、研修機会を提供していきます。

現場では、困難をかかえた子どもを前に、その「行動」を十分に理解できず悩んでいたり、「学級崩壊」傾向に直面し困っている等々、今までの経験では解決できない「問題」にぶつかっている先生が少なくありません。授業が始まっても席に着けなかつたり、おちついて課題に取り組めない子どもも増えています。他方、LD（学習障害）やADHD（注意欠陥／多動性障害）等の「新しい障害」をもつ子どもへの対応も学校の大きな課題になっていきます。

個々のケースに即した時間をかけた地道な活動が求められますが、教育相談を通して、先生方がこれらの「問題」とじっくり向き合い、子どもに即したき

教育相談活動

め細かな指導を創造できるような支援していきたくと考えています。そして、教育相談部が、地域の子育てと教育の発展を支える一端を担う力になればと思います。

今年度は、大学の相談室や学校現場を訪問してのコンサルテーション（個人のみではなく、複数の方や学校組織を対象に行う場合もあります）、及び研修を中心に行う予定です。通常の学級の先生はもちろん、保健室の先生や障害児学級の先生なども気軽に相談においで下さい。研修については、夏期現職教員講座を今年度は教育相談部で企画し、「子どもたちの問題」とどう向き合うか」というテーマで行います（八月一〜三日）。また、今日対応の急がれているLD（学習障害）等の「障害」をもつ子どもへの対応についての講座や学級経営心を育てるグループ・

アプローチの理論と実際の講座なども計画しています。

他方、教育相談部には全国からFAXやメールでの相談も寄せられており、遠隔地の場合には、これらの方法を使つての相談活動も行っています。教育相談部の活動についての詳細は、教育相談のご案内「や」ニュースレター（近刊予定）を参照してください。

相談の受付、その他お問い合わせは、地域交流研究センター 教育相談部直通（TEL&FAX） 055-4-45-2411（月曜から土曜の10時から17時。ただし、受付は大学の授業開講期間に限りません）

（写真は、教育相談室の様子を撮影したものです）

担当：河村茂雄（かわむら しげお、本学初等教育学科教員・教育臨床心理学）
田中孝彦（たなか たかひこ、本学初等教育学科教員・臨床教育学）
森博俊（もり ひろとし、本学初等教育学科教員・障害児教育）
粕谷貴志（かすや たかし、本学非常勤講師・教育臨床心理学）

都留を学ぶ・

山梨を学ぶ



山梨県との連携のもと、本学では昨年度から「山梨の魅力メツセンジャー」講座をはじめました。この講座は、山梨県産業交流課が二〇〇一年度から実施した「山梨魅力メツセンジャー制度」を受け開設されたものです。全国から集う本学の学生に、大が位置する都留市はもとより、郡内地域、さらには山梨県について幅広い知識と理解を得られる機会をつくる。そして「第二の故郷」山梨の魅力をさまざまな人に伝えてもらおう、というのが目的です。

地域との新たな交流を深める絶好の機会となるこの講座は、地域と大学の交流がテーマの一つとなる地域交流研究センターの重要な活動として位置づけられています。

昨年度は、三回の講座が実施されました。第一回（五月一日）は「富士の麓の城下町、都留の魅力」と題した講義と「まち歩き」。第二回（八月一日、二日）は「富士山の魅力」、「郡内の産業・伝統とハイテク」をテーマとした講義とパス見学。第三回（九月二八日、三〇日）は「山梨とワイン」、「戦国の雄、信玄」をテーマに講義とパス見学という構成でした。いずれも、講義と現地での見学をセットとしました。講師も、その分野の第一線でお仕事されている山梨在住の方々にお引き受けいただくことができ、この面でも本学の地域交流の幅を広げる機会になりました。

第一回の参加者は二四名でしたが、一年生から大学院生まで、それも全学科からの参加がありました。昨年の講座に参加した小林亮介さん（本学社会学科二年生）は、「じつさいに学外に出たことで、現場を知りいい機会になった。この講座がなければきっと知らなかった山梨の魅力を感じることができ、今後の自信につながる発見もあった」と感想を話してくれました。

また、遠藤舞子さん（本学社会学科二年生）は、「山梨の大学にきて、山梨を自慢できるものが何かよくわからなかった。でも、講座に参加したことで、大学のある都留や山梨のよさを再発見できた。また機会があれば参加したい。できれば自分たちで候補地を探す作業があるとさらに楽しみが増すかもしれない」と話してくれました。

磯崎由香さん（本学社会学科二年生）は、「身近な富士山でありながら、じつは何も知らなかったことに気がついたのが大きな成果。できればいろんな人が参加できるようにしくみをつくってほしい」と講座への注文と印象を語ってくれました。

今年度は、「グローバルな視点から地域を学ぶ」をテーマに、金曜日二時限の「歴史と文化」の授業を併用し、「山梨の魅力メツセンジャー」講座をおこなっています。「富士の魅力を探る」、「伝統を現代に活かす郡内の地場産業」、「信玄が遺した遺産とは?」、「山梨の風土を活かしたワインづくり」をテーマにした公開講演を授業の時間内におこないます。七月五日、午後一時から四時まで、「キラリと光る山梨をつくってきた方々に何?」と題して講演会を開催します。みなさんの参加をお待ちしています。

（連絡先：都留文科大学本部棟 四階四六研究室 千葉立也）

担当：千葉立也（ちば たつや・本学社会学科教員）

「山梨の魅力メツセンジャー」講座

01

May.2003

「地域交流センター通信」第1号：2003年5月31日発行

編集：都留文科大学地域交流研究センター・通信担当

(今泉吉晴・森博俊・畑潤・北垣憲仁)

発行：都留文科大学地域交流研究センター

〒402-8555 山梨県都留市田原3-8-1/電話：0554-43-4341 (代)